【研究ノート】

海保青陵「談五行」訳注稿（3）

坂本 頼之

【はじめに】

本稿は拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」（『国士舘哲学』第十九号　平成二十七年三月）「海保青陵「談五行」訳注稿（2）」（『国士舘哲学』第二十号　平成二十八年三月）に続き、江戸時代の漢学者海保青陵（1755～1817）の「談五行」の訳注を試みたものである。

「談五行」は滝本誠一氏編著『日本経済叢書』巻二十六（日本経済叢書刊行会　一九一六年七月（以下『叢書』と記述））に所収・刊行されたものが、同じ滝本誠一氏編著の『日本経済大典』第二十七巻（啓明社　一九二九年六月（以下『大典』と記述））に再録されており、また蔵並省自氏編『海保青陵全集』（八千代出版　一九七六年九月（以下『全集』と記述））にも収録されている。本稿では『叢書』所収の「談五行」を底本とし、『大典』『全集』を併せて参照した。いずれの「談五行」にも句読点と返り点が施されており、基本的にはそれに従って訓読している。「談五行」原文は一つの文章となっているが、本稿では内容により適宜区切っていくつかの文章に分けて番号をふり、【原文】【書き下し】【現代語訳】の順に記した。また【原文】の次に『叢書』『大典』『全集』の文に異同がある場合注をつけた。

青陵の語句の解釈は独特のものが多いため、訳注にあたっては青陵の著作を参考として解釈することに努めた。特に青陵の五行解釈がまとまった形で述べられている『洪範談』を、訳注を行う上で参考とした(注1)。青陵の著作の引用の際には『全集』を用い、引用した箇所の頁数を附し

ている。青陵の著述は片仮名漢字交じり文が殆どだが、引用の際には参照の便宜上、筆者が平仮名漢字交じり文に改めた。また引用された各経典、特に『書経』洪範を参照する際には『十三経注疏附校勘記』（中文出版社　一九七九年）を用いている（注2）。

（注1）　ただし前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」でも触れているように『洪範談』と「談五行」ではその解釈に異なる点も見られる。

（注2）　訳注を作成するにあたっての各資料の詳細については、前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」を参照していただきたい。

【原文（一）】

曰、三徳、正直猶中也、土也。剛克猶上也、火也。柔克猶下也、水也。作福作威玉食（注1）、福猶上也。威猶下也。食是平常之事、猶中也。

（注1）　原文「玉食」は、『叢書』『全集』では「五食」、『大典』では「玉食」となっている。『書経』洪範本文は「惟辟玉食」であり、引用としては『大典』の「玉食」の方が正確である。また『洪範談』には「惟辟玉食」について解釈がなされており、当時青陵が参照したであろう『書経』洪範も「玉食」となっていたと考えられる。以上のことから、恐らく「玉」と「五」の字形が近いためか、「談五行」が五行説を述べた文章であることに影響され、『叢書』の段階で誤って「五食」とし、『全集』がそれをそのまま転載したものと推測される。ここでは『大典』と『書経』洪範に従い「玉食」と改めた。

【書き下し（一）】

曰く、三徳、正直は猶ほ中のごときなり。土なり。剛克は猶ほ上のごと

きなり。火なり。柔克は猶ほ下のごときなり。水なり。作福作威玉食、福は猶ほ上のごときなり。威は猶ほ下のごときなり。食は是れ平常の事、猶ほ中のごときなり、と。

【現代語訳（一）】

青陵先生は仰った。「洪範の「三徳」のうち(注1)、「正直」(注2)とはちょうど「中」のようなものであり、また「土」である(注3)。「剛克」(注4)とはちょうど「上」のようなものであり、また「火」である(注5)。「柔克」(注6)とはちょうど「下」のようなものであり、また「水」である(注7)。「作福」「作威」「玉食」(注8)の、「福」はちょうど「上」のようなものである(注9)。「威」はちょうど「下」のようなものである(注10)。「食」とは日常の事柄であって、ちょうど「中」のようなものである(注11)」

（注1）　『書経』洪範の「乂用三徳」「三德。一曰正直。二曰剛克。三曰柔克。平康正直。彊弗友剛克。燮友柔克。沈潛剛克。高明柔克。惟辟作福。惟辟作威。惟辟玉食。臣無有作福作威玉食。臣之有作福作威玉食。其害于而家。凶于而國。人用側頗僻。民用僭忒」に関する青陵の解釈が述べられている部分である（『全集』では「乂用三徳」は「又用三徳」（『全集』p.600）となっており、「乂」と「又」が異なっている。ただ後で述べるように下文で青陵は「乂」の字義について述べており、そこでは『全集』も「乂」となっているため、「又」は「乂」の誤りと思われる）。「乂」とは「乂は治なり」（『洪範談』『全集』p.600）であり、「治」とは「病を治むるといふ治の字が、至極治の字の意にあたるなり。あしきものを取り除けてしまふて、よきものを新規に取立こしらへたる心もちなり」（『洪範談』『全集』p.600）とあるように、直して取り立てるの意味で解釈されている。「三徳」の「徳」とは「徳は悳の字なり。直心と云ふ事なり。天より下されたるままの心、一向に自己流のなき事なり」「徳とは天理にかなひたる心の事なり」（『洪

範談』『全集』p. 647）とされる。それを「今この心を三品にわけて、事物のあしらいよふを此心のはこびで、しこなすよふにしたるもの」（同上）、つまり対象に対しての心の働きかけ方を三種に分けて述べたものが「三徳」であると青陵は解釈している。そしてまた「三徳」とは「三品は又常数の三つなり」（『洪範談』『全集』p. 648）でもある。「常数の三」とは、青陵が「談五行」中で度々主張している、五を人為的に作られた数とみて、三を自然の理による数とみる説からきている。そのため「三徳」を指して「此処などはじかに天理の通りに三と出したる」（『洪範談』『全集』p. 600）と述べている。この三を自然の数とみる説については、詳しくは前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」の【原文（一）】の部分を参照していただきたい。

（注2）　「正直」とは「正は的の黒星なり。まんなかなり。直はまつすぐなり。心を動かさずに、上げもせず、下げもせず、唯、あるべきかかりにもちておると云ふ事なり」（『洪範談』『全集』p. 648）であり、対象に対して「剛克するに及ばず、柔克するに及ばぬ事」（同上）の場合、「あるべきかかりで」（同上）対処する心持ちのことと青陵は解釈している。その具体例として青陵は『洪範談』で、朝寝坊の人が早起きしようと思ったときに、「己れが心が此法をまもる心になりて、きつと朝早ふおきよふと思ふ」（『全集』p. 648）ような場合をあげている。

（注3）　「正直」が「中」であり「土」であることについて、青陵は『洪範談』で「中を正直と云ひ」「うごかぬを正といふ。土の位なり」（『全集』p. 600）、「正直は中なり。上・中・下の中なり。水・火・土の土なり」（『全集』p. 648）と説いている。ここで「上・中・下の中」と述べていることから考えると、ここでの「中」は中庸、すなわち過不及のない「中」とは異なるものである。また青陵は「正直」が「中」であり「土」に配される理由について「談五行」では明らかにしていないが、『洪範談』では「土は動かぬ平かなるものなり」（『全集』p. 648）

と述べた後で、心が上がりも下がりもせずに、中からまっすぐ動かずに在るべき有り様であることを理由としてあげている（該当の引用文は【現代語訳（一）】の（注2）に既にあげており、重複するためここではあげない）。

（注4）　「剛克」とは、青陵は『洪範談』で「剛克とは剛を以て勝つ事なり」（『全集』p. 648）と説明する。「剛」とは、青陵によれば「剛とは金や石のかたきよふにかたきなり。強と同じよふにてちがふなり」（同上）と、「剛克」「柔克」で対となる「剛柔」の「剛」と、「強弱」の「強」とでは異なるものであることが強調されて説かれている。またここでの「克」とは「克とはかつ事、治る事にて、せむるよふな心をかねてもちたる字なり」（同上）であり、ただ「勝つ」のではなく「其品をけつこうにせんと思ふて取り立る心なり」（同上）である。そのため「剛で治める」（同上）とも言い換えられている。これは「三徳」が「凡そ天下の事にもせよ、物にもせよ、こじなおすと云ふよふなる、とりたてるといふようなるときに」（『洪範談』『全集』p. 600）用いるべき心もちのことであるため、青陵はここでの「克」を、ただ勝つだけではない字義で解釈していると考えられる。「剛克」とは、朝寝の例でいえば「朝眠むいゆへに、何んの朝早ふ起ずともよい事じや、一向大朝寝をしてやろふ」（『洪範談』『全集』p. 649）といった場合、「これは剛克せねばならぬなり。つよふいかねばならぬなり。へさへつけるよふにせねばならぬなり」（同上）と「剛克」で強く抑えつけなければならないとしている。

（注5）　「剛克」が「火」であり「上」に配される理由について、青陵は「談五行」では説明していないが、『洪範談』では「ひどきを剛と云ふ。火の位なり」（『全集』p. 600）、「剛克は火のよふにて、柔克は水のよふなり」（『全集』p. 648）として、「てつぺんづけにゆくのが剛なり」（同上）であり、「左すれば剛は上の方」（同上）で「火は上へのぼる動きあり」（同上）であるため、「火」であり「上」であると説明している。

（注6）　「柔克」とは「柔を以て勝つなり」（『洪範談』『全集』p. 648）であり、「剛克」と対になる。「柔」とは「柔はやわらかなれ共、なめの皮のやわらかなるようなるを柔といふ。弱に似てちがふなり」（同上）と、「剛柔」の「柔」と、「強弱」の「弱」とが異なることが強調されて説かれている。「克」については「剛克」と同じであり、そのため「剛克」同様、「柔克」も「柔で治むる」（『洪範談』『全集』p. 648）と言い換えられている。「柔克」とは、朝寝の例で言えば「朝早ふ起きよふと思へば、朝早ふきつと早ふ起きる心になるゆへに、ねむとふても起る」（『洪範談』『全集』p. 649）と「此方にからかわぬ」（同上（筆者注・此方と争わないの意））ような場合、「此方からも至極やわらかに、心が気をなでさするよふにする」（同上）というように、下手にでてやわらかく「柔克」するべきであると説明している。

（注7）　「柔克」が「水」で「下」に配される理由について、青陵は「談五行」では説明していないが、『洪範談』では「やわらかきを柔と云ふ。水の位なり」（『全集』p. 600）、「下たから出てあやまるよふにするが柔なり」（『全集』p. 648）であり、「柔は下の方なり」（同上）で「水は下へさがる動きあり」（同上）であるため、「水」であり「下」であると説明している。

（注8）　『書経』洪範の「惟辟作福、惟辟作威、惟辟玉食」に関する青陵の解釈が述べられている部分である。『書経』本文の「惟辟」「作」について「談五行」では触れられていないが、「辟は君なり」「作は為なり。なすと訓ず。惟はひとりといふこころもちの字なり。ただのみといふて、惟君のみ惟君ばかりといふところへ用ゆ」（『洪範談』『全集』p. 650）とある。また「玉食」とは「玉食とは結構なる料理にて食事をする事なり」（『洪範談』『全集』p. 650）とされ、「玉」は「玉の字は唯美の字の場に用ひたるなり」（同上）と「美」の意で解釈されている。

（注9）　『洪範談』では「福」とは「さいわいと訓ず。ここでは賞の

字にあたる。褒美の事になるなり」（『洪範談』『全集』p. 650）とあって、褒美のことと解釈されている。「福」が「上」とされる理由は「談五行」には述べられておらず、また『洪範談』では「福」は「上」と結びつけられてはいないため、ここで「「福」はちょうど「上」のようなものである」とされる理由については不明である。但し「福」は『洪範談』では「臣下の功の有る時に褒美をやるは、是れ功を君上よりこれほどの功じやとはかりて、きわめてそれだけの褒美をやる事なり」（『全集』p. 651）と、君主が臣下の功に対して与える褒美と解釈されており、そこから、その褒美によって臣下が上位に昇進することを指して「上」としているとも考えられる。

（注10）「威」とは「をそろしきものの事なり。ここでは刑の字にあたる。仕置の事なり」（『洪範談』『全集』p. 650）とあって、仕置のことと解釈されている。「威」が「下」とされる理由は「談五行」には述べられておらず、また『洪範談』では「威」は「下」と結びつけられてはいないため、ここで「「威」はちょうど「下」のようなものである」とされる理由については不明である。但し、「威」は『洪範談』では「君上より仕置をいいつけてから、臣下の罪定まるなり」（『全集』p. 651）と、君主が臣下に対して仕置を下して罪が決定されることと解釈されており、そこから、その仕置によって臣下が下位に降格することを指して「下」としているとも考えられる。

（注11）この文「食は平常の事」は難解である。「中」と結びつけて解釈されている所からすれば、「福」（褒美）「威」（仕置）といった非日常の事柄が「上」「下」であるのに対して、「食」は褒美でも仕置でもない日常の事柄であるから「平常の事」であり、「上」でも「下」でもない「中」に配されるということかとも考えられる。それは例えば「天下の事物皆三つなり。上か中か下か三つなり。吉か凶か、吉凶なしに平常なるか三つなり」（『洪範談』『全集』p. 657）と述べているのと同様に、「吉」「凶」に対する「平常」を指しているのではないだろう

か。ここではこの推測に従い解釈した。参考までに青陵の「平」「常」の解釈としては、「平はひととおりなり」（『洪範談』『全集』p. 648）、「常はあひかわらぬと訓ず」（『老子国字解』『全集』p. 800）「常は相かわらず定まりたる也」（『老子国字解』『全集』p. 909）「常は相かわらぬと云ふ事」（『老子国字解』『全集』p. 921）などがある。また「食」は『書経』洪範の「八政」にもあり、「談五行」の前文でも「八政、食貨祀為三数」とある。「八政」の「食」については、前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（2）」の【現代語訳（二）】を参照していただきたい。

【原文（二）】

曰、稽疑、雨霽蒙、雨猶水也。霽猶火也。蒙是不雨不霽之名、属土、即中也。是為三位。駅者、今日雨、而来日亦雨、今日霽、而来日亦霽、故為絡駅之義矣（注1）。克者、今日雨、而来日霽、今日霽、而来日雨、是霽克雨、々克霽也。故為克革之義矣。此二位、語三者之形也。貞悔者、吉凶也。此二位、語三者之功咎也。汝一位、卿士一位、卜筮一位、汝猶上也。卿士猶下也。卜筮是無定位。故猶中也。

（注1）　『大典』では「為」の字に返り点として三点がついているが、二点がないため、二点の誤りと考えられる。『叢書』『全集』ともに二点になっている。

【書き下し（二）】

曰く、稽疑、雨霽蒙、雨は猶ほ水のごときなり。霽は猶ほ火のごときなり。蒙は是れ雨ふらず霽れざるの名にして、土に属す、即ち中なり。是れ三位為り。駅とは、今日は雨、而して来日も亦た雨、今日は霽、而して来日も亦た霽、故に絡駅の義為り。克とは、今日は雨、而して来日は霽、今日は霽、而して来日は雨、是れ霽雨に克ち、雨霽に克つなり。故

に克革の義為り。此の二位は、三者の形を語るなり。貞と悔とは、吉と凶となり。此の二位は、三者の功咎を語るなり。汝一位、卿士一位、卜筮一位、汝は猶ほ上のごときなり。卿士は猶ほ下のごときなり。卜筮は是れ定位無し。故に猶ほ中のごときなり、と。

【現代語訳（二）】

青陵先生は仰った。「洪範の「稽疑」(注1) の「雨」「霽」(注2)「蒙」(注3) のうち、「雨」はちょうど「水」のようなものである。「霽」はちょうど「火」のようなものである。「蒙」とは、雨が降らず、日も照らない天気を指して呼ぶ名称であり、「土」に属す。つまり「中」である (注4)。この「雨」「霽」「蒙」で三つの位である (注5)。「駅」とは、今日雨で明日も雨、または今日晴れで明日も晴れ（というような天気の移り変わり）を表しており、そのためこの「駅」とは、「絡駅」（という言葉）の「駅」の意味である (注6)。「克」とは、今日は雨だが明日は晴れ、今日は晴れだが明日は雨（というような天気の移り変わり）を表しており、これは雨からがらっと変わって晴れ、晴れからがらっと変わって雨になるということである。そのためこの「克」とは、「革」（と似た意味の）「克」の意味である (注7)。この「駅」と「克」の二つの位は、三（雨・霽・蒙）と置いた位の変化の様子を述べたものである (注8)。「貞」と「悔」とは、吉と凶である (注9)。この「貞」と「悔」との二つの位は、三（雨・霽・蒙）と置いた位の変化（駅・克）の行く末が、手柄（吉）となるか罪（凶）となるかの判断を述べたものである (注10)。「汝」が一つの位であり、「卿士」が一つの位であり、「卜筮」が一つの位であり、「汝」はちょうど「上」のようなものであり、「卿士」はちょうど「下」のようなものである。「卜筮」は定まった位が無い。だからちょうど「中」のようなものである (注11)」と。

（注1）　『書経』洪範の「明用稽疑」「稽疑。擇建立卜筮人。乃命卜筮。曰雨。曰霽。曰蒙。曰驛。曰克。曰貞。曰悔。凡七。卜五。占用二。衍忒。立時人作卜筮。三人占。則從二人之言。汝則

有大疑。謀及乃心。謀及卿士。謀及庶人。謀及卜筮。汝則從。龜從。筮從。卿士從。庶民從。是之謂大同。身其康彊。子孫其逢吉。汝則從。龜從。筮從。卿士逆。庶民逆。吉。卿士從。龜從。筮從。汝則逆。庶民逆。吉。庶民從。龜從。筮從。汝則逆。卿士逆。吉。汝則從。龜從。筮逆。卿士逆。庶民逆。作内。吉。作外。凶。龜筮共違于人。用静。吉。用作。凶。」に関する青陵の解釈が述べられた部分である。「明用稽疑」の「明」とは「明はあきらむるなり。何とも知れにくき事を決断する事なり。くらきところへあかひものを持出して、照して見るよふにするゆへに明といふなり」（『洪範談』『全集』p. 601）であり、「稽疑」とは「稽はかんがふるなり。くらべて見て考るを稽と云ふなり。つき合せて見くらぶる事なり」（『洪範談』『全集』p. 601）「稽は稽同とて、同じよふなるものをならべて、考へ合せ見合せて、判断をするなり」（『洪範談』『全集』p. 654）、「疑」とは「疑はうたがひなり」（『洪範談』『全集』p. 601）であり、「明用稽疑」とは、疑わしき事がある場合、天の意を占いによって伺うことを民に明示すること、と青陵は解釈する。ただ占いという行為そのものを青陵が重視している訳ではないことは「是をうやうやしく祭る事発狂のるいなり」（『洪範談』『全集』p. 602）と述べていることからもわかる。あくまで青陵がいう「明用稽疑」とは「民百姓が疑心を決するため」（同上）である。

（注2）　「霽」とは「霽ははるると訓ず」（『洪範談』『全集』p. 656）とあるように、晴れた天気のこと。ただし青陵が「晴とはちがふなり」（同上）と述べるように「晴」と「霽」とは異なる。青陵は「晴は雲もなくててりたるなり。ゆへに青に従ふ。青天になりて日がてらすなり」「霽は雨のあがりたるなり。雨のやみたるなり。ゆへに雨に従ひて斉に従ふ。斉はそろひたるなり。雨がちやんと止みて、すぐれぬ天気がなおりたるなり」（『洪範談』『全集』p. 656）と説明している。つまり「晴」は雲一つ無く澄み切った青空の晴れであり、「霽」は雨上がりの

晴れた天気のことである。

（注3）　「蒙」とは「蒙はくらしと訓ず。ふりもせず、てりもせず、くもりてくらきなり」（『洪範談』『全集』p.656）と青陵は解釈している。つまり曇った天気のことである。

（注4）　「雨」が「水」、「霽」が「火」に配され、「蒙」が「土」「中」に配されている。青陵はここでは述べていないが、「談五行」の今までの配当からすれば、「水」は「下」であり「火」は「上」であるため、「雨」は「水」「下」、「霽」は「火」「上」となって、「雨が降らず、日も照らない」と「上」でも「下」でもない「蒙」が、「中」であり「土」となるのだと推測される。ここではこの解釈に沿って現代語訳した。水・火・土と上・中・下の関係については、例えば【現代語訳（一）】の「三徳」の「正直」「剛克」「柔克」の配当を参照のこと。

（注5）　青陵は物事を判断する上で、対象となる事物を自然の常数である「三」に仮に分類して考える手懸かりとすることを「手がかりなきなり。ゆへに天気にして見れば天気の容ち三つなり。ゆくえ二つなり。このかたち三つといふが天の定理なり。雨ふるか、はるるか、ふるともはるるともつかぬ。ヶ様に三つならではわからぬなり」「先づ吉凶をかんがふる時に、位を三等に置くべきなりと云ふことなり」（『洪範談』『全集』p.657）と主張している。この「三位」もその「位を三等に置」いた「三位」と考え解釈した。この「三位」が例えば上・中・下であり、水・火・土であり、吉・凶・平常であるのであって、それぞれは具体的な水・火・土や上・中・下を指しているのではない。ここで雨・霽・蒙と天気の「三位」が述べられているのも「天気のはなしをするよふなれ共、天気にかぎりたる事にあらず。心いきを天気によそへていいたるものなり。始めに疑はしきをかんがへ合する法なりといふて、天気の事をばかりいふ理なき事なり」（『洪範談』『全集』p.658）とされ、天気で譬えて説明しているのだと青陵は解釈している。

（注6）　「絡駅」とは、人馬のなどの往来が連なって続く様子を表す

言葉である。「駅」の字には「絡駅」以外にも「駅駅」や「駱駅」など、連続して途切れぬ様子を表す連綿語の構成要素としての働きがあり、青陵も「駅はつづくと訓ず。今日も雨ふり、明日も雨ふれば、雨がつづくなり」（『洪範談』『全集』p. 656）と解釈している。ここではこれに従い現代語訳した。

（注7）　「克」とは「克はかつと訓ず。今までの事をうちなおして、さらりとかへたるなり。今まで雨ふりたれ共あがりたるか、今まで雨はふらひでおりたるが、雨がふり出したるかなり。是今までとはくわらりとちがふて、うちなおしたるよふゆへに克といふなり」（『洪範談』『全集』p. 656-657）と青陵が解釈しているのに従って現代語訳した。本文「克革」は前文にある「絡駅」と対になっているが、「絡駅」と違い「克革」に熟語としての用例は管見の限り見当たらず、熟語としての意味は不明である。ただ「克」と「革」は、古音は韻が同部であり（現代平水韻では「克」は入声「職」部、「革」は入声「陌」部）音通したという説が『十三経注疏』の『周礼』天官の疏にあり、ここではそれを参考に「克革」という熟語ではなく、「克」と「革」が古音が近く、語源的に字義も似ていることを述べたものと解釈し、現代語訳した。

（注8）　「この三等は今見たるままの所なり。この見たるままの物のゆくへを見るなり。いつまでも見たるままでおるものでなきゆへに、このさきはどふなるといふて見るに、二たいろあり。此通りで変ぜずにゆくか、又は変じて事がらくわらりとかわるか、此二色なり」（『洪範談』『全集』p. 657）と、仮に置いた三等の位がどの様に推移していくかの様子として、変わるか、変わらないかの二つがあり、それを表したのが「駅」と「克」であると青陵は解釈している。ここではそれに従って現代語訳した。

（注9）　「貞」とは青陵によれば「貞は相かわらぬ事なり。女の徳なり。一ぺん夫をきわむれば、其夫が愚人であろふが、悪人であろふが、一生夫にもちておると云ふきみなり。おちつきた

るなり。もはや存じよりのかわらぬ事なり」（『洪範談』『全集』p. 658）とされる。また「悔」とは青陵によれば「悔は今までのしかたあしきゆへに、今度かへるなり」（『洪範談』『全集』p. 658）とされる。この「貞」が「吉」で、「悔」が「凶」であるが、「貞は吉なりといふてもたらず。よきゆへにそれにおちつけたといふ字なり」（『洪範談』『全集』p. 658）であり、「悔は凶なりといふてもたらず。おちつかずにかへるがよいと云ふ字なり」（同上）であって、どちらもが「一つはかへずに吉を得るといふ字なり。一つはかへて吉を得るといふ字なり」（『洪範談』『全集』p. 658）とされる。

（注10）「事物を見て一いろと思ふは浅き事なり。三つと分けて其三つのゆくえを分けて、その上で善悪をつけねば、真の善悪といふものではないといふ事なり」（『洪範談』『全集』p. 658）とあるように、まず対象を仮に三つに分け、それが変化するかしないかの行方を見て、その行方の結果が善であるか悪であるかを見極めることを青陵は説く。同様のことを「この三つとわけて、ゆくえを又別に二つととりて、其後にきめたる貞悔が、真の貞悔じやといふは詳なる事なり」（『洪範談』『全集』p. 659）、「先づ始めに事にもせよ、物にもあれ、一つと見ずに三つとして見る。又ゆくえを二た道にわけて、右の五品にてかんがえて、貞・悔を定めよといふ」（『洪範談』『全集』p. 660）、「人の疑はしき事を決するには、三通りの位に、二通りのゆくすえに、二品の吉凶をさだめて」（『洪範談』『全集』p. 660）と何度も述べており、ここではそれに従って現代語訳した。また「功」とは「功は手柄也」（『老子国字解』『全集』p. 830）であり、「咎」とは「咎は罪なり」（同上）、また「咎はとがと訓ず。わざわいの類なり。多くは天の咎のときにつかふ字なり。天の咎は即ちわざわいなり」（『洪範談』『全集』p. 672）とあるように、天によって下される罰、災いのことである。ただし青陵の天には人格的要素はなく、天理のことであって、その罰というものも、人格神が下す天罰ではない。

そのため「天には休も咎もなし。人のつかいよふしだいなりと思ふべし。つかいよふにて、休にも咎にもなる」（同上）と説かれる。以上のことから「咎」とは、人が天理に反した結果、受ける不利益のことであり、「凶」を指すと考えられ、「功」とはその反対に天理に従った結果、受ける利益のことであり「吉」を指すと考えられる。

（注11）　『書経』洪範の「汝則有大疑。謀及乃心。謀及卿士。謀及庶人。謀及卜筮」に関する青陵の解釈である。「謀」とは「謀は某に従ひ言に従ふ。人々の所存をきく事なり。某々にものをいはせて見てきく事なり」（『洪範談』『全集』p. 661）であり、「及」とは「及はそれまでへもゆきとどくと云ふ事なり。下々の内心をもききて見る事なり」（同上）とされる。この箇所の解釈は「談五行」と『洪範談』では異なっており、「談五行」では本文にあるように、「汝」と「卿士」が上・下に配され、また「卜筮」は「無定位」であり中に配されている。一方『洪範談』では、「汝」は「上なり。火なり」（『洪範談』『全集』p. 661）とされ、「談五行」と同じく上に配されるが、「卿士」は「卿士は中なり。土なり」（同上）であり、「庶人は下なり。水なり」（同上）とされ、中に配されるのが「卿士」、下に配されるのは「庶人」となる。この『洪範談』の配当は、「卿士」が「卿士は卿と大夫と士との事なり。君と民との間の人々なり」（同上）と解釈されていることも関連していると考えられる。そして「卜筮」は「卜と筮とは陰と陽となり。気なり。道なり。これ天・地・人・道といふも、水・火・土・気といふも同じ事なり。これが即ち自然の数にてこれより外には数なきゆえんなり」（『洪範談』『全集』p. 661）とされる。このように『洪範談』における「卜筮」とは「陰陽」であり、「水火土（庶人・汝・卿士）」に対する「気（卜筮）」であり、「天地人」に対する「道」である。これらは皆「三定位」に対する「一虚位」という関係であり、『洪範談』『老子国字解』で青陵が主張する思考の枠組みである。一方で「談五行」では

「汝」と「卿士」が上・下、「卜筮」が中で「無定位」であり、これは「二実位（定位）」に対する「一空位（虚位・無定位）」であって、「談五行」や『前識談』などにみられる思考の枠組みである。青陵の「三定位一虚位」についての先行研究に若水俊氏「海保青陵と老子　―「三定位一虚位」認識法に基づく批判精神を中心として」『茨城女子短期大学紀要』第十八号　平成三年三月）、松井真希子氏『徂徠学派における『老子』学の展開』（白帝社　平成二十五年三月）などがある。また「三定位一虚位」と「二実位一空位」の思考の枠組みの違いと、そこから推測される青陵の思考の展開については、拙稿「思考の枠組みから見た海保青陵の思想の展開」（『東洋学研究』第五十四号　平成二十九年三月掲載予定）にまとめている。

【原文（三）】

曰、庶徵、雨一位、暘一位、風一位、亦三也。燠是暘之属、寒是雨之属。極備与極無、即過不及也。故曰凶也。星好雨好風、二者亦不得其中也。言月宜正行（注1）、勿所倚焉。雨風与正行、亦三数也。

（注1）　原文「言月宜正行」は『叢書』『大典』『全集』ともに「言月」でかわらない。しかし『書経』洪範の本文は「庶民惟星。星有好風。星有好雨。日月之行。則有冬有夏。月之從星。則以風雨」と「日月」の常行と「星」の個別の好みが対比されている箇所であり、「言月」ではなく「日月」であるという可能性があるかもしれない。今は『叢書』『大典』『全集』に従った。

【書き下し（三）】

曰く、庶徵、雨一位、暘一位、風一位も、亦た三なり。燠は是れ暘の属、寒は是れ雨の属なり。極備と極無とは、即ち過不及なり。故に曰く凶なり、と。星は雨を好むあり風を好むあり。二者も亦其の中を得ざるなり。

言ふこころは、月は宜しく正行すべくして、倚る所なかれ、と。雨風と正行とも、亦た三の数なり、と。

【現代語訳（三）】

青陵先生は仰った。「洪範の「庶徴」(注1) のうち、「雨」が一つの位、「暘」(注2) が一つの位、「風」が一つの位で、これらもまた三という数になっている。「燠」とは「暘」に属するものであり、「寒」とは「雨」に属するものである（から五ではなく三である）(注3)。「極備」と「極無」とは、つまり過不及のことであり、そのため（『書経』洪範で）「凶」とされているのである (注4)。「星」には雨を好むものもあれば、風を好むものもあり (注5)、（雨を好むこと風を好むことの）二つもまた（極備と極無と同様に偏っていて）「中」を得てはいない (注6)。つまりは「月」は「月」の持ち前の正しい運行をすべきであって、（ある方向へと）偏ってはいけないということを言っているのである (注7)。「雨」と「風」と「正行」(注8) とでも、また三の数となっているのである」と。

（注1）『書経』洪範の「念用庶徴」「庶徴。曰雨。曰暘。曰燠。曰寒。曰風。曰時。五者來備。各以其叙。庶草蕃廡。一極備凶。一極無凶。曰休徴。曰肅。時雨若。曰乂。時暘若。曰哲。時燠若。曰謀。時寒若。曰聖。時風若。曰咎徴。曰狂。恆雨若。曰僭。恆暘若。曰豫。恆燠若。曰急。恆寒若。曰蒙。恆風若。曰王省惟歳。卿士惟月。師尹惟日。歳月日時無易。百穀用成。乂用明。俊民用章。家用平康。日月歳時既易。百穀用不成。乂用昏不明。俊民用微。家用不寧。庶民惟星。星有好風。星有好雨。日月之行。則有冬有夏。月之從星。則以風雨」についての青陵の解釈が述べられた部分である（『全集』は「庶徴。曰雨」の「雨」の字を「両」にしている。「雨は水なり」（『洪範談』『全集』p. 668）と青陵の解説がついているため、「両」は「雨」の誤りと考えられる）。「庶徴」とは「庶はもろもろなり。いろいろの事をならべたてて云ふ事なり。徴はしるしと訓ず。証拠の事な

り。きざしの事なり」（『洪範談』『全集』p. 602）、「庶はもろもろと訓ず。種々の事あるゆへ庶と云ふなり。徵はしるしと訓ず。証拠と云ふ事なり。きざしと云ふきみなり」（『洪範談』『全集』p. 667）であり、「もろもろの事物のきざし証拠をとりて推すべき手がかりなり。ゆへに庶徵といふなり」（同上）と、将来の推測に際して、様々な事象を証拠や手がかりとすることと青陵は解釈している。

（注2）「暘」とは青陵によれば「暘は日のてる事なり」（『洪範談』『全集』p. 667）である。

（注3）「燠」と「寒」とは「燠はあたたかなるなり。寒はさむきなり」（『洪範談』『全集』p. 667）、「あたたかなると、さむきとなり」（『洪範談』『全集』p. 668）と解釈される。この「雨」「暘」「風」「燠」「寒」の五つの配当が、『洪範談』と「談五行」では異なっている。『洪範談』では「此五の者又水・火・土・陰・陽なり。雨は水なり。暘は火なり。風は土なり」「燠は陽なり。寒は陰なり。あたたかなると寒きとは気なり。即ち水・火・土・陰・陽なり。水・火・土・気なり」（『洪範談』『全集』p. 668）とあるように「燠」「寒」を気であり陰・陽であると解釈している。このように水・火・土・木・金の五行を、水・火・土・気（陰・陽）と解釈するのが、『洪範談』における青陵の五行説の一つの特徵であるが、「談五行」では水・火・土・木・金の五行を、水・火・土と木・金に分け、木・金を「土之部属」としたり、木を「土之属。而受命於水也」、金を「土之属。而受命於火也」と土に属させるといった違いが見られる。この文でも「雨一位、暘一位、風一位も、亦た三なり。燠は是れ暘の属、寒は是れ雨の属なり」とあるように、「雨」「暘」「風」「燠」「寒」の五者を、「雨」「暘」「風」の三と、「燠」「寒」の二に分ける所までは『洪範談』と同様であるが、「燠」「寒」の二つが「属す」という形で三に組み込まれる点で『洪範談』と大きく異なる。「談五行」の五行説については、前述の拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（1）」の【原文（六）】の部分を参照し

ていただきたい。

（注4）『書経』洪範の「一極備凶。一極無凶」に関する青陵の解釈が述べられている部分である。「今雨ほどけつこうなるものなし。左れ共あまり雨すぐれば五穀できぬなり。暘ほどけつこうなるものなけれ共、あまり暘すぐれば五穀できぬなり。風にても、燠にても、寒にても、過るは甚凶なりと云て、たらぬも又凶なり」（『洪範談』『全集』p. 668）とあるように、何事であれ過ぎたることも足らざることも「極備は過なり。極無は不及なり」（『洪範談』『全集』p. 669）であって「中」ではなく、「極備は凶、極無は凶」（同上）と「凶」とされる。この過・不及・中の「中」と上・中・下の中を混同することを青陵は「古への中といふは、過・不及のない至極の上々の事なり。後の中といふは、上へゆかぬ中ぐらいの事なり。この古への中を中ぐらいの中とよみたるゆへに、其中の上への上がよいと思ひたるなり。中の上へは過なり。上・中・下の中と、過・不及・中の中とまちがひたるゆへ、大ちがひになりたるなり」（『洪範談』『全集』p. 669）と後世の誤りであると批判する。この過・不及・中の「中」を、青陵は天理と結びつけて解釈しているが、その「中」と天理の関係については、拙稿「『前識談』の構造からみる海保青陵の思想」（『東洋学研究』四十七号　平成二十二年三月）で考察している。

（注5）『書経』洪範の「庶民惟星。星有好風。星有好雨。日月之行。則有冬有夏。月之從星。則以風雨」に関する青陵の解釈が述べられたところであり、『洪範談』では「日輪を以て君にたとふ。月輪を以て卿士・師尹の役人にたとふ。星を以て庶民にたとふ」（『全集』p. 678）と、「星」とは庶民であると解釈されている。また本文「星好雨好風」について、『洪範談』では「星には風を好むあり。雨を好むあり」（『洪範談』『全集』p. 678）と、「星」が雨も風も好むのではなく、「沢山の星なれば、いろいろの好みあるべき事なり。人でいふて見れば、このみなり」（同上）と、衆星の好みが様々であることを「好雨」「好風」と述べて

いると解釈している。ここではそれに従って現代語訳した。

（注6）「好む」ことが「中」を得ないとは、「談五行」の前文に「好与悪、過不及也」とあるように、好むことは偏りであり、過不及であるため「中」ではないとされる。また『洪範談』には「凡そこのみ事はひがみなり。かたよりなり」（『全集』p.679）と、「好む」ことが「かたより」であると解釈されているが、偏りも「談五行」で同様に「偏与陂、所謂過不及也」と過不及であるとされる。「談五行」における「過不及」の用例について、詳しくは拙稿「海保青陵「談五行」訳注稿（2）」の【原文（四）】を参照していただきたい。

（注7）「月」「正行」について、『洪範談』に「春秋緯に月畢にかかれば雨滂沱たり。月箕にかかれば風沙を揚ぐとあり」（『全集』p.678）とあり、古来中国では月が天空をめぐる際に、特定の星宿を歴ると、その星宿によって、風が吹いたり、雨が降ったりするとされていたことから、「月が行道するに、風ずきの星へよれば風がふく。雨ずきの星へよれば雨がふる。是は皆月の常行を失ひて、星の方へよりたるなり。星の方へ月のよるのは宜しふない事じや。月は月の常道あれば、どちらへもよらずに、月のもちまへの通りをまもりて、行道すればよき事なり」（『洪範談』『全集』p.678-679）と、月（役人）が持ち前の常道を失い、星（民）の好みに左右されることを戒めていると青陵は解釈している。また「日・月は常行ありて、めぐらねばならぬものなり。星にはかまわずに、己がもちまへをめぐるなり」（『洪範談』『全集』p.678）とも述べており、ここではそれに従って現代語訳した。

（注8）ここで青陵は「風」と「雨」と「正行」とで、自然の数である三であるとしている。但し「風」「雨」は『書経』洪範本文からであるが、「正行」は洪範本文にはない。洪範本文は「日月之行。則有冬有夏。月之從星。則以風雨」であるため、本文通りであれば「風」「雨」と「行」とで三とすべきところではある。

（以下続稿）